

動労千葉

84. 5. 26

No. 1650

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五・六（公衆）〇四七二（22）七二〇七

「過員」として職場破壊を許す

動労本部「革マル」を掃く総反撃に決起せよ

「国鉄監査委員会」の「帰休（自宅待機）制度」導入の提言をうけた国鉄当局は、五月二日「増収セールスや特別改札では根本的解決にならない」として「関連企業への出向・派遣や一時帰休など、何らかの民間的な抜本的対策を検討する」ことを明らかにしました。

すでに「過員対策」と称する悪らつな攻撃は全国的にかけられ、抵抗する労働者には徹底した弾圧が加えられています。

われわれは、「職場と仕事を守るため」と称し、当局と一体となって「働こう運動」を展開する動労「本部」革マルを一掃し、総反撃に起とうではありませんか。

労働者・労働組合を分断・破壊する「過員」攻撃

「合理化」の強行により生み出された「過員」は、当局発表でさえ五八年度末で約二万五千人に及んでいます。

そして、「過員」問題を利用した当局の攻撃によつて全国で多くの問題が発生しています。

例① 新鶴見地区の状況

59・2貨物合理化により新鶴見ヤードが廃止され、新鶴見機関区では予備要員を合わせた一三〇名の予備者は三カ月以上も予備勤務させられています。

また、新鶴見操車場は八〇〇名の要員が、一・二〇名に削減され、労働者は「要員センター」や各現場に強制配転させられました。

東洋一といわれた新鶴見操車場の廃止により、乗務員、検修合わせて一四〇名の「過員」が生じた新鶴見機関区では、組合員が「仕事がない」「大幅な収入減」を訴え、不安が拡大する一方、職場がほぼなくなった新鶴見操車場は、組織や人間関係までもが完全に分断・破壊されてしまったのです。

「去るも残るも地獄」ならば闘う以外にない

今日「過員」により仕事を奪われた労働者に対して、「ブラ勤」に甘んじるのか、それとも「配転」に応じるのかの二者択一を当局が悪どく迫るという状況がくりひろげられています。

例② 「要員センター」の実態

「門司営業開発センター」は、乗務員休養室（寝室）を改造した五〇七畳ほどの三つの「タコ部屋」に、それぞれ六〇九人がつめこまれ増収のための学習と切符売りをさせられています。

仙台駅の「営業開発グループ」では「監獄のような」狭い部屋に九七名も入れられ、増収の授業やセールス活動をやらされています。

「松本要員センター」（長野）では「機動要員」という名目で配転、出向が乱発され、Aさんは、七カ月に十二カ所、Bさんは八カ所の職場を「タライ回し」されています。

第二マル生攻撃は始まった

こうした事例はほんの一例にすぎません。「要員センター」では、労働組合の否定はおろか労働者の人権をも否定した数々の実態が発生しています。「職場規律の確立」を口実にしたネクタイ・名札の着用強制はもとより「トイレの所要時間が長いと文句をいう」との報告もされています。

そして、労働者は「波動要員」と呼ばれ、欠員の生じた各現場へのタライ回しが行われ、当局の都合だけで将棋の駒のように転配させられているのです。

「過員」を利用した第二マル生攻撃は確実に始まっています。こんな悪どい攻撃をはねかえす強固な組織体制をうち固めていかねばなりません。

（次号につづく）

（昭和59年5月24日）

58

過剰人員の吸収策

国鉄監査報告で提言へ

自宅待機制度を導入

84. 5. 8

連日つづける

出向などの抜本策検討

国鉄労働者連帯

522

に形勢が表明

悪どい革マル